

ロナルド・レーガン研究

— 政治的魅力の源泉を問う

村 田 晃 嗣

はじめに — なぜ今レーガンなのか？

アメリカ合衆国第四〇代大統領ロナルド・レーガン (Ronald Reagan) の神格化は、二一世紀に入ってから着実に進んできた。すでに一九九七年には、「ロナルド・レーガン遺産プロジェクト」なるものさえ始まり、全米三〇六七のすべての郡に彼の名を冠した建物や橋、公園などを設置しようとしていた。首都ワシントンにも、レーガンの名を戴いた空港や連邦政府ビルがある。

二〇〇一年二月のギャラップ世論調査では、レーガンはジョン・F・ケネディ (John F. Kennedy) やエイブラハム・リンカーン (Abraham Lincoln) を僅差で抑えて、「史上最も偉大な大統領」に選ばれた。翌月には、アメリカ海軍の最新型原子力空母 (CVN 76) が「ロナルド・レーガン」と命名されている。同年九月二一日の同時多発テロ以降は、

愛国心の高揚のために、ジョージ・W・ブッシュ (George W. Bush) 政権は意図的にレーガン人気を利用し、また大統領もレーガンを模倣しようとしてきた。

二〇〇四年六月五日に、レーガンは九三歳で他界したが、その直後の中間選挙では、共和党が連邦議会の上下両院で多数を制した。とりわけ、レーガンの衣鉢を継ぐ保守派の台頭は著しかった。さらに、その一年後のインターネット調査では、レーガンは再びリンカーンを抜いて、ついに「最も偉大なアメリカ人」になってしまった。他方その頃には、ブッシュ大統領は再選を果たしたものの、イラク戦争後の混乱に苦しみ、二〇〇五年八月末にはハリケーン「カトリナ」に遭遇して支持率を大幅に下落させていた。

その模倣者とは異なり、レーガンは自らの政治的人生を見事に演じきったといえよう。何しろ、早くも大統領退任時には、彼は自らの葬儀の詳細を三〇〇ページに上る資料に定め、その後も家族がそれを毎年更新するという周到ぶりであった。

だが、レーガンの人生は矛盾と謎に満ちていた。この保守的な大統領は、民主党リベラル派からの転向者であり、「小さな政府」と「強いアメリカ」を標榜しながら、着任時の三倍に上る膨大な財政赤字を残し、ソ連との和解に着手して政権を去ったのである。「建国の父祖」の一人トマス・ジェファソン (Thomas Jefferson) は、しばしば「アメリカのスフィンクス」と呼ばれる。今やレーガンこそ、この呼称にふさわしいかもしれない。¹⁾

レーガンは後年ほとんど崇拜の対象になったが、そうした一般の評価とは別に、専門家による評価は必ずしも高くない。例えば、ニューヨーク州のシエナ大学が二〇一〇年に政治学者や歴史かを対象に実施した大統領調査では、レーガンの評価は歴代四人中一八位にすぎない。因みに、一位はフランクリン・ローズヴェルト (Franklin D. Roosevelt) で、ブッシュは三九位である。

また、在職中のレーガンは知性に欠ける元B級映画俳優と軽蔑され、危険なタカ派として、その政策やイデオロギーはしばしば激しい非難にさらされた。アドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler) や吸血鬼ドラキュラと並んで嫌われたことすらある。毀誉褒貶は政治家の常とはいえ、レーガンの場合そのギャップは著しい。だが、彼と敵対し彼を非難する者でも、レーガンの個人的な魅力を否定することはむずかしかった。政治的な反発と個人的な愛着が違和感なく共存するという点で、レーガンはアメリカそのものである。

後述のように、レーガンに関する評伝や研究は、すでに膨大な量に達している。二〇一一年はレーガンの生誕一〇〇周年に当たることから、彼を主人公にした映画も製作中で、同年後半には公開予定である。政治学者ポール・ケンゴー (Paul Kengor) による二冊の評伝が、この映画の基礎になるとい^②う。

本稿は、レーガンの今日の人気の意味を考えつつ、今後のレーガン研究の意義と課題を検討する、ささやかなスケッチである。まず次節で、これまでのレーガン研究を分類・整理する。次いで、レーガンが政治家になるまでの時期を扱った研究を通じて、彼の政治的人格形成と政治的魅力の源泉について検討する。その上で、今後のレーガン研究の展望について考察してみたい。

レーガン研究の潮流

レーガンを研究するに当たっては、当然ながら、いくつかの必須の文献がある。まずは、彼の二冊の自伝である。一冊目はカリフォルニア州知事選挙をめざした頃 (一九六五年) であり、もう一つは大統領退任後 (一九九〇年) のものである。^③ 前者には「私の体の残り半分はどこだ？」という風変わりな書名が冠せられている。これはレーガンが出演し

たサム・ウッド (Sam Wood) 監督の映画『キングス・ロウ』(一九四二年)での、彼の有名な科白である。この作品は「私のこれまで出演した中でも最もいい映画だったと信じている」と、レーガンは回想している。⁽⁴⁾ キングス・ロウという中西部の架空の町での物語で、レーガン演じる青年は作業中に事故に遭う。治療に当たった偏執的な医師は、青年がかつて娘と交際していたことを快く思わず、青年の両足を必要もないのに切断してしまうのである。

この書名が示すように、エンターテイナーから転じて、レーガンは政治家として第二の人生を歩みだした。それは、リベラルから保守派への転向でもあった。従って、彼の前半生については一冊目の自伝のほう詳しいし、大統領退任後のものに比べれば、より率直である。

レーガンは書簡の人であった。その生涯を通じて、彼は一万通以上の手紙を書いたとされる。他方、大統領時代には、レーガンは一日に一万から一万二〇〇〇通の手紙を受け取った。もちろん、そのうちで大統領の手元まで達するのは、ごくわずかであった。それでも、大統領は熱心に返信した。「書くことは他者と同様に自己とのコミュニケーションである。ほとんど必要上の問題として、巧みに書く人はよく考える人でもある」と、レーガン政権で国務長官を務めたジョージ・シュルツ (George P. Shultz) は「レーガンの知性を過小評価する向きを牽制している。⁽⁵⁾ この膨大な書簡の中で、レーガンが一一歳の時のもの(一九二二年一月二一日付)から最後のもの(一九九四年一月一四日)まで一〇〇〇通以上を、保守系のシンクタンク・フーヴァー研究所の三人の研究者が編纂している(うち二人はレーガン政権に関与していた)⁽⁶⁾。いずれも、レーガンの人間像と人間関係を理解する上で、貴重な一次資料である。

また、この三人の編者はレーガンの演説原稿をも編集・出版している。⁽⁷⁾ 大統領就任までは、彼はほとんどの演説を自ら起草していたのである。そのために、通俗的・実務的なものを中心ながらも、彼は読書を重ね、熱心にメモをとった。同様に、レーガンは日記の人であった。一九八一年の大統領就任当初から八九年の退任時まで、彼は丹念かつ継続的

に日記をつけていた。歴史家のダグラス・ブリנקリー (Douglas Brinkley) がこれを編纂し、二〇〇七年に出版している。⁸⁾ ブリנקリーによれば、これほど継続的に日記をつけた大統領は、レーガン以外にはジョージ・ワシントン (George Washington) とジョン・Q・アダムズ (John Q. Adams)、ジェームズ・ポーク (James Port)、そして、ラザフォード・ヘイズ (Rutherford Hays) だけだといふ。⁹⁾ 因みに、その後の二〇一〇年には、ジミー・カーター (Jimmy Carter) の大統領時代の日記も刊行された。こうした形で大統領の日記が出版されたのは、レーガンとカーターだけである。両者の比較研究の可能性も拡がろう。

レーガンの日記を一瞥すれば、世評とは異なり、彼がきわめて勤勉であり、様々な問題に思索を巡らせている様子がわかる。しかも、複雑な出来事が簡潔に記されている。レーガンは日記の中でも要約の達人である (この点、カーターの日記ははるかに叙述的である)。すでに日記の一部は、レーガンの二冊目の伝記に引用されていたが、ブリנקリー編纂の日記が刊行されたことにより、それらが後知恵や自己正当化ではないことが確認できる。

さらに、デモラとジェラルド・ストローバー (Deborah Hart & Gerald S. Strober) 夫妻が、レーガン政権の広範な関係者へのオーラル・ヒストリーを編纂している。¹¹⁾ 夫妻はケネディとリチャード・ニクソン (Richard M. Nixon) 政権のオーラル・ヒストリーも手がけてきた。

さて、こうした基本文献や公文書、さらには関係者とのインタビューに頼りながら、これまでに膨大なレーガン研究が蓄積されている。本稿では、これらを時間的な射程から三種類に大別してみたい。

まず、単に大統領としてだけでなく、レーガンを二〇世紀アメリカの歴史や文化の中に位置づけようとする試みである。彼の生涯 (一九一一―二〇〇四年) がほぼ二〇世紀全体に重なり、特に二〇世紀後半の大衆文化と政治の双方を体現しているからである。

ピュリッツァー賞受賞の歴史家ゲリー・ウィルズ (Gary Wills) による評伝『レーガンのアメリカ——内なる無垢』(一九八七年) は、そうした試みの代表的な成功例であろう。¹² ラジオ・アナウンサー、映画俳優、組合運動指導者、大企業の広報マン、カリフォルニア州知事と、ホワイトハウスに至るレーガンの多彩なキャリアを丹念に分析することで、ウィルズはレーガンの人物像を立体的に描いている。副題の「無垢」(Innocent) は、アメリカ史のキーワードでもある。また、この著者らしく、本書ではレーガンとリンカーンとの比較が随所に散りばめられている。レーガンが二〇世紀アメリカの偶像なら、リンカーンは一九世紀アメリカのそれであった。¹³

ルー・キャノン (Lou Cannon) による一連の評伝も、この系譜に属そう。¹⁴ キャノンはカリフォルニア州知事時代からレーガンを取材してきた古参のジャーナリストである。分析手法や叙述はオーソドックスだが、カリフォルニア時代を中心に数ある伝記の中でも情報量は最も豊富である。二〇一〇年のクリスマスマス休暇には、支持率低迷に悩むバラク・オバマ (Barack Obama) 大統領もキャノンによるレーガン大統領伝を読んだという。¹⁵

レーガン自身が公認した評伝として、やはりピュリッツァー賞作家のエドモンド・モリス (Edmund Morris) による『ダッチ』(一九九九年) がある。¹⁶ この公式評伝のために、レーガンは長時間のインタビューに答えている(ただし、すでに彼はアルツハイマー病を発病していたから、その記憶は失われつつあった)。「ダッチ」とはレーガンの子供時代のあだ名である。モリスもレーガンの全生涯を包括的に扱ってはいる。しかし、著者が架空の人物を創り出し、レーガンの人生に何度も邂逅するという設定にしたため、伝記ではなく小説だという強い批判を招いた。

近年ではさらに、レーガンのハリウッド時代など、政界入り以前の個別の研究が進んでいる。これらについては、次節で改めて論じる。

第二に、レーガンを一九八〇年代の象徴として、レーガン以降の保守優位の時代の終焉を論じる研究である。一九八

○年大統領選挙でのレーガンの勝利は、フランクリン・ローズヴェルト以降の「ニューディール連合」を崩壊させ、リベラル優位の時代を終焉させた。それまで分裂気味だった外交・安全保障での保守勢力（強いアメリカ）と社会的保守（人工中絶反対、銃規制反対、同性愛反対など）、そして経済的保守（小さな政府）を、少なくともイメーজのレベルで糾合することに、レーガンは成功した。「レーガン革命」と呼ばれる所以である。レーガンを「右翼のローズヴェルト」と見る学者もある¹⁷。

ただし、一九八〇年の大統領選挙の段階で明白だったのは、リベラルの敗北であって必ずしも保守の勝利ではなかった。すでに一九七〇年代を通じて、リベラルは道徳的・宗教的な言説を回避して「選択の自由」を尊重する中立的な言説に終始し、保守派に押されてきた¹⁸。レーガンの勝利を契機に、続く八〇年代を通じて、保守がアメリカの政治と社会で主流化するのである。

こうした時期区分をめぐる研究動向には、二つの動機がある。一つは、二〇〇一年一月に成立したジョージ・W・ブッシュ政権の思想と政策の源流をレーガン時代に求め、両者を比較しようとするものである。二つ目は、二〇〇八年九月一五日の米大手証券会社リーマン・ブラザーズ (Lehman Brothers) の破綻に端を発する経済危機を受けて、一九八〇年代以降の新自由主義的な規制緩和やグローバリゼーションを批判的に見直そうとするものである。

歴史家のギル・トロイ (Gil Troy) による『アメリカの夜明け——ロナルド・レーガンはどのように一九八〇年代を創り出したか』(二〇〇四年) は、レーガンの個性にも注目し、彼を強硬な保守イデオログとしてではなく「幸福な戦士」(happy warrior) と位置づけている。その上で、レーガンが一九八〇年代を通じてベトナム戦争とウォーターゲート事件で分裂したアメリカ社会の統合に成功したと、同書は高く評価している。「政治が単なるパワー・ゲームや資源配分の問題ではなく、シンボルの衝突と意味の集団的模索をしばしば伴うことを、レーガンは示したのである」¹⁹。「ア

アメリカの夜明け」とは、一九八四年のレーガン再選の際に多用された表現であり、同年のロサンジェルス・オリンピックの成功こそは、レーガンによる社会統合の象徴であった。同じ保守の系譜にあっても、レーガンが社会を統合したのに対して、ジョージ・W・ブッシュは分裂させたことになる。

外交専門家のジョン・エーマン (John E. Emswiler) も一九八〇年代のアメリカを「レーガンの時代」と定義している²⁰⁾。技術革新から税制、規制緩和まで、この時期にアメリカ社会は大きく変貌したが、レーガンがコンセンサスを重視し漸進的な手法をとったことが、抵抗を少なくし変革を可能にした鍵だったと、エーマンも分析している。

プリンストン大学教授のシヨーン・ウイレンツ (Sean Wilentz) による『レーガンの時代——一九七四—二〇〇八年の歴史』(二〇〇八年) は、より長期に一九七四—二〇〇八年の時期を保守優位の時代、つまり、レーガンの時代と定義している。一九七四年はニクソンがウォーターゲート事件で失脚し、共和党内でより保守的な勢力が台頭する転機となった。ウイレンツによれば、良し悪しは別にして、アメリカ政治史の中で一時代を代表しうる政治家として、レーガンはジェファソンやアンドリュー・ジャクソン (Andrew Jackson)、リンカーン、セオドア・ローズヴェルト (Theodore Roosevelt)、そして、フランクリン・ローズヴェルトに比肩しうるとい²¹⁾う。

しかし、レーガンに代表される保守主義は、やがて分裂し過激化していく。

いくつかの点で、保守運動は成功の犠牲者であった。ソ連が消滅し、インフレーションがほとんど無視できる水準にまで下がり、高額の税率が一九八〇年の半分になると、ロナルド・レーガンが就任時に公約した主要な目標のすべては達成され、当惑し御しがなくなった保守派は今や国をどこに導くかをめぐって対立を始めた。レーガン主義自体が、思想的にも政策的にもすでに消耗しきったという認識も、ますます強まっていた。そのため、レーガン主義はより過激な形態をとって、二〇〇〇年の大統領選挙以降に生き残りを果たすのである²²⁾。

保守系のシンクタンクであるアメリカン・エンタープライズ研究所のステイーヴン・ハイワード (Steven F. Hayward) は、最新の二冊の浩瀚なレーガン伝を刊行している。一冊目は一九六四―八〇年を対象にオールド・リベラルの崩壊の中でレーガンの台頭を描き、二冊目は一九八〇年代の保守主義の躍進の中でレーガンを「英雄」と位置づけている。⁽²³⁾ 民主党はレーガンの外交上の成功を評価しながら、その内政での成果を認めず、共和党はリベラルに対する彼の勝利を祝うが、彼と党内主流派との闘争から目を逸らしている。歴史家はレーガンの雄弁とカリスマについて語るが、彼の政策的な聡明と明確なビジョンを見逃している。レーガンは政治と権力を深く理解しており、明確で一貫したビジョンを抱いていた。こうして、一九八〇年代のアメリカは「英雄」を発見したのだ、とハイワードは絶賛している。

先述のルー・キャノンとカール・キャノン (Carl Cannon) の親子は、力点をジョージ・W・ブッシュに置きつつ、レーガンからブッシュへの保守派の流れを描き、ブッシュを「レーガンの弟子」と位置づけている。⁽²⁴⁾ 「はじめに」でも触れたように、ブッシュはレーガンを模倣しようとした。しかし、「レーガンとたえず比較することは、ブッシュにとって結局は不利に働いた」、なぜならば、自ら評価の基準を高く設定することになるからだ、と、キャノン親子は指摘している。⁽²⁵⁾ 彼らもまた、ブッシュの退陣でレーガン以降四半世紀を越える保守優位の時代の終焉を予見していた。

もとより、その後のオバマ政権の支持率の低迷と共和党内での過激な保守勢力「ティー・パーティー」(Tea Party)の台頭を考えれば、ブッシュの退陣で保守の時代の終焉を宣言することは、安易にすぎるかもしれない。一九八〇年代や「レーガンの時代」の位置づけには、さらなる時間と分析を要するようである。歴史家のローレンス・レヴィン (Lawrence W. Levin) が指摘するように、われわれは「どこでも『予測できない過去』と向きあっている」⁽²⁶⁾。さて、第三の研究動向は、冷戦の終焉とそこでのレーガンの役割に着目するものである。

冷戦終結の最大の要因は、ソ連でのミハイル・ゴルバチョフの登場であって、レーガンの登場はソ連の社会的・経済

的な疲弊というタイミングに恵まれたただけだ、とする見方は根強い。²⁷レーガンの時代に米ソの軍備管理交渉が停滞したこともあって、レイモンド・ガーンフ (Raymond Garthoff) など、こうした見解を示す軍備管理の専門家は少なくない。²⁸これに対して、レーガンの一貫した対ソ戦略と反共主義に、冷戦の終焉の最大の要因を見出す保守派の論者もまた多い。歴史家のジョン・デギンズ (John Patrick Diggins) に至っては、レーガンの反共主義をリンカーンの奴隷解放に比肩する偉業として、理想が歴史を切り拓いた好例と見なしている。²⁹海軍大学院教授のジョン・アーキユイーラ (John Arquilla) も、レーガンは核不拡散や対テロ政策では成果を挙げなかったが、対ソ戦略全般には成功したと見る。彼によれば、レーガンには明確な理念があったが、必ずしもイデオロギー的教条に陥らない柔軟さもあったという。³⁰しかし、すでにカーター政権の末期からアメリカの軍拡と対ソ経済制裁は始まっていたし、ソ連の態度が軟化したのは、後者が解除された後である。しかも、ソ連の経済力はレーガン政権の推定よりもはるかに弱体化していた。

よりバランスのとれた見解として、ジャーナリストのジェームズ・マン (James Mann) は、「レーガンが冷戦に勝利したのではない。ゴルバチョフが冷戦を放棄したのだ」と述べている。ただし、「アメリカで他の多くの者がゴルバチョフの重要性を認識していなかった時に、レーガンはそれに気づき、冷戦の終焉への環境づくりに協力したのである」³¹。もとより、冷戦を終わらせたのはレーガンかゴルバチョフかという二者択一は愚問である。近年では、レーガンとイギリスのマーガレット・サッチャー (Margaret Thatcher) 首相との協力関係を「政治的結婚」として重視する研究や、この二人とローマ法王ヨハネ・パウロ二世 (Johannes Paulo II) の協力に着目する研究も現れている。³²

以上のように、レーガンをめぐっては、二〇世紀全般、一九八〇年代、そして冷戦の終焉と、長期から短期まで様々な射程から研究がなされている。その政策やイデオロギーについては評価が分裂しながらも、レーガンの個性や象徴機能、コミュニケーション・スキルについては、肯定的な評価で一致している。

果たして、両者はどのように結びつくのであろうか。そして、今日の高いレーガン人気の源泉はどこにあるのであるか。

政治的人格形成

ここでは、レーガンの前半生の来歴を瞥見した上で、その政治的人格形成と魅力の源泉を探ってみよう。

ロナルド・ウィルソン・レーガンは、一九一一年にイリノイ州で生まれた。父はアイルランド系カトリックの移民の末裔で、靴のセールスマンとして職場を転転としていた。母は熱心な「キリストの使徒」教会（福音派の一派）の信者であり、禁酒運動や慈善活動にも精力を傾けていた。レーガンは父から巧みな話術とハンサムな外見を、そして、母からは敬神の念や樂觀主義を受け継ぎ、母に伴われて教会に通い、演劇や詩に関心を寄せた。

地元の高校を卒業後に、レーガンは「キリストの使徒」教会の経営するユーレカ大学に学んだ。彼が大学を卒業する頃は世界大恐慌の渦中であり、レーガンは苦勞の末にアイオワの小さなラジオ局にアナウンサーとして就職した。当時の彼は父と同様に熱心な民主黨員であり、ニューデイル支持者であった。

レーガンはスポーツ・アナウンサーとして有名になったが、一九三七年にハリウッドでワナー・ブラザーズと契約して映画俳優の道を進むことになる。いわゆるB級映画を中心に活躍し、一九四〇年には女優のジーン・ワイマン (Jane Wyman) と結婚した（一九四八年に離婚）。アメリカが第二次世界大戦に参戦すると、レーガンは陸軍に召集され、主として戦意昂揚映画やドキュメンタリー映画に出演した。

第二次世界大戦後、レーガンは高率の所得税に不満を抱くとともに、ハリウッドの俳優組合の委員長を務め、共産党

系の組合と戦い、いわゆる「赤狩り」に積極的に協力する。この間、一九五二年には女優のナンシー・デーヴィス(Nancy Davis)と再婚した。今のところ、離婚歴のある唯一の大統領領である。同年の大統領選挙では、レーガンは共和党のドワイト・アイゼンハワー(Dwight D. Eisenhower) 将軍に投票している(当初は、アイゼンハワーの民主党大統領候補への擁立に熱心であった)。

テレビの台頭とシャーマン反トラスト法によるスタジオ・システムの崩壊(制作と配給の分離)などで、映画産業が斜陽化し、出演作に恵まなくなると、レーガンは大手電機メーカーのゼネラル・エレクトリック(GE: General Electric)のテレビ番組の司会を務め、全国のGE施設を巡回講演することになった。GEの「親善大使」役を通じて、彼は財界との関係を構築していった。一九六二年のカリフォルニア州知事選挙では、ニクソンを応援して、共和党に転じている(ニクソンは落選)。

やがて、一九六四年の大統領選挙では、レーガンは強硬な反共主義者である共和党のバリー・ゴールドウォーター(Barry Goldwater) 上院議員を支持し、「歴史とのランデヴー」という有名な応援演説を行なった。ゴールドウォーターは惨敗したが、レーガンは一躍共和党保守派のスターとなり、一九六六年のカリフォルニア州知事選挙に擁立され、民主党現職のパット・ブラウン(Pat Brown)を大差で下すのである。ブラウンは「リンカーンを暗殺したのも俳優だった」と、レーガンの経歴を攻撃し、敵を過小評価して大敗を喫した。レーガンはしばしば過小評価されることで、予期せぬ成果を挙げてきた。

さて、レーガンの政治的人格形成に重要な影響を及ぼしたのは、まず第一に家庭であり、とりわけ母の存在である。二冊の回顧録の中でも、彼は母についてくり返し語り、母への愛情を表現している。しかし、レーガンの母は次男の政界入りに先立つ一九六二年にアルツハイマー病との闘病の末に亡くなっているので(この点でも、レーガンは母の影響

を受けたと言える)、彼女に関する特集もインタビューも残ってはいない。先に紹介したレーガンの書簡集にも母への手紙は含まれていないし、レーガン大統領図書館にも母からのオリジナルな資料はほとんどない。もちろん、彼女は伝記も記していない(フランクリン・ローズヴェルトからジョージ・W・ブッシュに至る一二人の大統領の母親のうち、六人もが自伝を刊行している)。

ところが近年、レーガンの俳優時代の熱烈なファンだった女性とレーガンの母との往復書簡が発見された。ジャーナリストのボニー・アンジェロ(Bonnie Angelo)は、それを基にしてアメリカ大統領の母親たちに関する一章をレーガン母子に割いている。⁽²⁴⁾レーガンの楽観主義は、明らかに母親の影響であった。彼に大きな影響を与えたもう一人の女性、つまり、二番目の妻ナンシーも、この点をはっきり認めている。⁽²⁵⁾この楽観主義こそは「アメリカの夜明け」というレーガンの政治的呼びかけにつながり、党派を超えた彼の国民的人気の源泉であった。母はさらに、次男に信仰と奉仕の精神を教えた。レーガンが「大きな政府」を嫌い、減税を追求した理由は、俳優時代に高率の税金に苦しんだ経験の他に、弱者は自助努力と地域社会の奉仕によって救済されるべきであり、政府の介入に頼るべきではないという一九世紀的な信念だったのである。救済とノスタルジーは、レーガンの保守主義の核心である。

他方、レーガンの父は、アルコール依存症であった。父が仕事に失敗するたびに、レーガン一家は各地を転転としなければならなかった。幼い転校生は社交的でなければ、小さな共同体には受け入れてもらえない。この幼少期も、中西部からハリウッド入りした青春期も、そして民主党から共和党に転じた政界でも、レーガンは常に「部外者」であった。父のような人生の落伍者にならないためには、向上心が必要であった。

因みに、ビル・クリントン(Bill Clinton)もレーガンと同様にアイルランド系であり、幼少期に継父のアルコール依存症と暴力に苦しんだ(レーガンの父は、暴力をふるうことはなかった)。クリントンも社交的で楽観主義的、そして

上昇志向の強い人物であった。彼の場合も、そうした資質は父に対するトラウマと無縁ではないのかもしれない。かつてウッドロー・ウィルソン (Woodrow Wilson) に関する多くのサイコ・ヒストリー研究が著されたが、レーガンについても同様のアプローチが必要であろう。³⁶⁾

第二に、軽視されがちだが、ラジオ局での経験も、のちの政治家レーガンにとって貴重な資産となった。一九二〇年代には、商業用のラジオ局が全米に広がっていった。優れた通信技術を有する人々が、第一次世界大戦の軍隊生活から戻ってきたことが、大きな理由である。特に、シカゴを中心とした中西部には多くのラジオ局があった。ラジオのアナウンサーの中には、映画俳優並みの知名度や人気を誇る者も少なくなかったのである。大学を卒業する頃には、レーガンは俳優を志していた。しかし、それは非現実にも思えた。そこで、彼は最初のステップとして、ラジオのアナウンサー、とりわけ、スポーツ・アナウンサーになることを望んだのである。

このアナウンサーとしての経験を重視するが、先述のゲリー・ウィルズである。確かに、レーガン自身も「俳優をやったことのない人間に大統領職が務まるだろうか」とくり返し述べている。しかし、シナリオと編集、そして演出に大きく依存する映画俳優の経験だけでは、政治家としてのレーガンの当意即妙は習得できなかったであろう。それはラジオの実況中継を通じて鍛えられたものである。また第二次世界大戦中、彼は陸軍のドキュメンタリー映画作成でも、ナレーションを数多く担当している。「何しろ彼自身はまったく理解していない事柄なのに、彼が語ると信じがたい説得力をもってしまうのだ」と、当時の同僚は語っている。³⁷⁾

さらに、レーガンはバリトンの美しい声をもっていた。この点では、彼が尊敬したフランクリン・ローズヴェルトと同じである。リンカーンもバリトンの美声だったという。レーガンはカリフォルニア州知事を退任後もラジオ番組に出演していたから、人生の大半を声によって生計を立てていたことになる。リンカーンからオバマに至るまで、大統領に

とつて、声は重要な政治的武器なのである。

ラジオを最も効果的に用いた政治家は、アメリカでは上述のローズヴェルト、ヨーロッパではアドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler) であった。喜劇王チャールズ・チャップリンは、そのヒトラーを風刺した映画『独裁者』(一九四〇年)のラスト・シーンの大演説で、「飛行機とラジオは我々を接近させ、人類の良心に呼びかけて世界を一つにする力がある」と語っている。レーガンもまったく同感であったろう(ただし、彼は飛行機に乗ることを恐れて、長らく忌避した)。大統領就任後も、彼は毎週土曜日にラジオで国民に語りかけ続けた。

第三にもちろん、映画界での経験である。この時期のレーガンを扱った研究書も、何冊か出版されている。³⁸⁾ 彼は作品には恵まれなかったが、「B級映画のエロール・フリン (Errol Flynn)」と呼ばれ、一九四〇年代には人気は高く収入も高かった。高収入に最高税率九四% (一九四四―四五年) を課せられたことが、彼の減税と「小さな政府」への信念を確固たるものにした。

戦後は人気も収入も低迷するが、映画俳優組合 (Screen Actors Guild: SAG) の委員長として長らく活躍した(一九五四―五二年と五九年)。レーガンはとりわけ、共産主義勢力の暴力的な組合乗っ取りに抵抗して、ニューディール・リベラルから反共主義に転じた(終戦直後には、彼自身が共産党への入党を考えた時期もあったとされる)。さらに、彼はのちに経済思想家のフリードリッヒ・ハイエク (F. A. Hayek) の『隷属への道』(一九四三年)³⁹⁾ にも強い影響を受けたという。共産主義体制はレーガンの憎む「大きな政府」の代表であり、彼の信じるキリスト教とも相容れなかった。先のシユルツの指摘のように、レーガンの知性を過小評価すべきではないし、彼の反共主義は決して便宜的なものではなく、積年の信念に根ざしていた。

さらに、レーガンが「赤狩り」に積極的に協力し、連邦捜査局 (Federal Bureau of Investigation: FBI) の密通者

として「T10」と呼ばれていたことも、今日では明らかになっている⁽⁴⁰⁾。また、彼はSAG委員長でありながら、ジャック・ワーナー（Jack Warner）やルー・ワッサーマン（Lew Wasserman）らハリウッドの大立者には、きわめて従順・忠実であった⁽⁴¹⁾。権威と体制への順応は、レーガンの性格の重要な特徴の一つである。

確かに、レーガンはショービジネスでの経験から、表現力やコミュニケーション能力を磨き上げた。そのため、彼はあくまでB級映画俳優であり、側近たちに支えられて大統領の職を演じたにすぎないという俗説は根強い。しかし、ウィルズの指摘するように、そうした議論は政治家としてのレーガンの過小評価であるとともに、俳優としての彼の過大評価である。俳優レーガンは、たった一つの役柄しか演じ切れなかった。それは明朗な中西部の若者であり、ロナルド・レーガン自身である⁽⁴²⁾。

俳優としての経験がのちの政治家レーガンに与えた影響としては、まず組合活動を通じての反共主義の信念の確立が重要であり、次いで、ショービジネスを通じて華麗な人脈を入手したことである。すでに一九五二年の大統領選挙で共和党のアイゼンハワー候補は初めてテレビにスポット広告を打って、当選を果たした。一九六〇年の大統領選挙では、ケネディとニクソンとのテレビ討論会が決定的な意義を有したことは、広く知られている。つまり、テレビの普及に助けられて、アメリカの政治にショービジネス的な要素が拡大しつつあったのである。いわば「セレブによる政治」(Celebrity Politics)である⁽⁴³⁾。レーガンの経歴と人脈は、この政治的潮流にみごとに合致した。

このように、政界入りまでのレーガンの前半生をたどると、政治家としての彼の魅力と成功の源泉が、すでに用意されていたことが、よくわかる。

「グレート・コミュニケーター」と称されるように、レーガンの政治的魅力と人気は、多分にそのコミュニケーション能力に依拠していた。それは多くのレーガン研究の認めるところである。レーガン以降の大統領の中にも、クリント

ンやオバマのように優れたコミュニケーション能力を有する者はある。しかし、レーガンのように大衆文化的背景をもった大統領は、他にはいない。彼は単に元俳優だったにとどまらず、ラジオ、映画、テレビとメディアの変遷を自ら体験しているのである。

こうしたコミュニケーション能力と並んで、レーガンには政治的統合機能があった。ニューデイル以来、アメリカ政治の基調はリベラルであり、保守、とりわけイデオロギー的な保守勢力は異端視されてきた。政治家としてのレーガンは、「小さな政府」という経済的保守と、反共主義に代表される外交・安全保障面での保守、そして、キリスト教的価値観や社会秩序の重視という社会的保守を統合する役割を果たした。本稿では詳述しないが、法や社会秩序についての保守的姿勢は、カリフォルニア州知事として学生運動や対抗文化 (counter culture) と対峙したことを通じて、さらに確固たるものになった。

様々な保守勢力は内部矛盾を抱えていた。反共主義による軍拡は「大きな政府」につながるし、社会秩序を重視しすぎれば、経済的自由が損なわれる。もとより、レーガンもこうした矛盾を政策レベルで解決することはできなかった。しかし、民主主義や自由、秩序を救うという「救済ファンタジー」(rescue fantasies) がレーガンにはあったと、歴史家のロバート・ダレク (Robert Dallek) は指摘している。このファンタジーが様々な保守勢力を統合する触媒作用⁴⁴を果たしたのであろう。しかも、レーガンは過去や伝統のノスタルジーに働きかけるとともに、明るい未来について楽観的に語った。共通の記憶としての歴史が浅いだけに、共有できる希望として未来にも統合作用を求めるのが、アメリカの保守の特徴であった。いわば、レーガンは政治的タイム・マシンであり、彼のお気に入りの映画がロバート・ゼメキス (Robert Zemeckis) 監督の『バック・トゥ・ザ・フューチャー』(一九八五年) だったことは、決して偶然ではない。

先述のように、一九八〇年のレーガンの大統領当選で、広範な支持層からなる「ニューデイル連合」は崩壊し、南

部の保守的な民主党員の多くがレーガンを支持した。いわば、かつてのレーガン自身の転向の大規模な追体験であり、彼らは「レーガン・デモクラット」(Reagan Democrat)と呼ばれた。まだこの段階では、カーターに代表されるリベラルの敗北が明確になっただけであった。しかし、一九八〇年代を通じて、レーガンは巧みに保守勢力を共和党とアメリカ政治の主流に押し上げ、保守優位の時代、つまり、「レーガンの時代」を構築したのである。⁴⁵⁾

すでにその前半生において、レーガンは家庭環境とハリウッド、そしてGEとのつながりなどを通じて、多面的な保守の信念を確立していた。彼の保守イデオロギーは単純ではあっても、決して付け焼刃ではない。しかも、彼のコミュニケーション能力と楽観主義、単純化、体制順応主義、大衆的人気が、時として内部対立を繰り返してきた保守勢力を統合し、拡大強化したのである。

また、レーガンは確固たるイデオロギーを持ちながらも、政治的実践ではきわめて柔軟で妥協的でもあった(それは多分に組合活動での経験によるが、カリフォルニア州知事の経験でも補強された)。そのため、彼は一部の保守派からは裏切り者とさえ呼ばれた。さらに、レーガンは「大きな政府」や共産主義、対抗文化など抽象的な政治概念を厳しく攻撃したが、特定の個人を怒りや憎しみをこめて攻撃することはなかった。それ故、彼の政策とイデオロギーを蛇蝎のように嫌う政敵たちも、レーガン自身の魅力を否定することはできなかった(逆に、レーガンの熱心な支持者でも、彼の妻ナンシーに好意を抱けた者はほとんどいなかったという。ナンシーは「憎まれ役」として夫を守り抜いたのである)。

結びにかえて

冒頭でも触れたように、レーガンの大統領としての業績は矛盾に満ちており、その評価は決して容易ではない。しかし、彼がアメリカ社会の自信回復に貢献し、保守勢力の糾合に成功したことはまちがいない。そのレーガンを「グレート・コミュニケーター」として評価するには、本稿で示したように、彼の前半生を二〇世紀のアメリカ史と大衆文化の中で検討する作業が必要である。パトリック・モイニハン (D. Patrick Moynihan) の指摘するように、政治が文化を変えられるとリベラルが信じるのに対して、政治ではなく文化こそ社会の成功を規定すると保守はみなしている。⁶⁶ 保守政治を理解するには文化的視点は不可欠である。

大統領や外交、安全保障といった古典的でハードな研究テーマと、大衆文化やメディア史、ジェンダー、エスニシティーなどカルチャラル・スタディーズとの間に、大きな乖離が生じていることは、アメリカ研究をはじめ、多くの地域研究の深刻な問題である。レーガン研究は、両者を架橋する可能性を秘めている。

また、政治とコミュニケーション、リーダーのコミュニケーション能力や象徴機能といった観点からレーガンを考察し、比較リーダーシップ論につなげることもできるかもしれない。同時代のマーガレット・サッチャー (Margaret Thatcher) や中曽根康弘との比較は、一九八〇年代論としても意義をもとう。

本稿でも述べたように、「レーガンの弟子」ブッシュの挫折と退場によって、保守優位の時代、つまり「レーガンの時代」は終焉したと見る歴史家は少なくない。では、サラ・ペイリン (Sarah Palin) らを中心に、二〇一〇年の中間選挙で大きな勢いをみせた「ティー・パーティー」運動は、いかに評価されるべきであろうか。そもそも、一九七〇年代にカリフォルニアで高まった減税運動を、アメリカ独立革命以前のボストン茶会事件に喩えて評価したのは、他なら

ぬレーガンであった。

「ティー・パーティー」運動は過激に「小さな政府」を提唱するが、レーガンとは異なり怒りや憎悪を煽つて、アメリカ社会全体と保守勢力をも分断する役割を果たしている。「ティー・パーティー」運動のうねりは、保守勢力の挽回なのか。それとも、「レーガンの時代」の断末魔の叫びであろうか。「ティー・パーティー」のような保守勢力の先鋭化こそ、保守の退潮を意味しているとも解釈できるからである。しかも、政治の分断化や先鋭化の背景には、メディアの変容がある。レーガン時代の規制緩和によって、ハリウッドを含めたメディアの大規模な再編と融合が起つた。ケーブル・テレビやインターネットの普及によって、人々は情報の氾濫に悩み、特定の主義主張に分断されていく。これに貧富の拮差が拍車をかけている。レーガンのような政治的コミュニケーション能力と統合機能をもつても癒しがたい亀裂に、アメリカ社会は直面している。皮肉にも、それをもたらした主要な一因は、レーガンの政治だったのである。レーガン研究は一九八〇年代を超えて、アメリカの政治全般や保守主義を考察する上でも、欠くことのできない重要なテーマである。

このように、レーガン研究は、歴史と政治学、地域研究のいずれにとつても、豊かな素材を提供する宝庫なのである。

- (1) John Arquilla, *The Reagan Imprint: Ideas in American Foreign Policy from the Collapse of Communism to the War on Terror* (Chicago, IL: Ivan R. Dee, 2006), p. 3.
- (2) Paul Kengor, *God and Ronald Reagan: A Spiritual Life* (NY: HarperCollins, 2005); *The Crusader: Ronald Reagan and the Fall of Communism* (NY: Harper Perennial, 2007).
- (3) Ronald Reagan and Richard C. Hubler, *Where's the Rest of Me? Ronald Reagan Tells His Own Story* (NY, 1965); Ronald Reagan, *An American Life* (NY, 1990). 後者の翻訳は「ロナルド・レーガン（尾崎浩訳）わがアメリカンドリーム レーガン回想録」（読売新聞社、一九

九三年)。

- (4) 『わがアメリカン・ドリーム』、一二五ページ。
- (5) Foreword by George P. Shultz, Kiron K. Skinner, Annelise Anderson, and Martin Anderson, eds., *Reagan: A Life in Letters* (NY: Free Press, 2003), p. ix.
- (6) *Ibid.*.
- (7) Kiron Skinner, Annelise Anderson, and Martin Anderson, *Reagan In His Own Hand: The Writing of Ronald Reagan That Reveals His Revolutionary Vision for America* (NY: Free Press, 2001).
- (8) Douglas Brinkley, ed., *The Reagan Diaries* (NY: HarperCollins, 2007).
- (9) *Ibid.*, p. viii.
- (10) Jimmy Carter, *White House Diary* (NY: Farrar, Straus and Giroux, 2010).
- (11) Deborah Hart Strober and Gerald S. Strober, *The Reagan Presidency: An Oral History of the Era* (DC: Brassey's, Inc. 1998).
- (12) Garry Wills, *Reagan's America: Innocent at Home* (NY: Penguin Books, 1987).
- (13) ウィルズのビュリッツァー賞受賞作品は、「リンカーンのゲティスバーグ演説を分析した研究である。ゲリー・ウィルス(北沢栄訳)『リンカーンの三分間——ゲティスバーグ演説の謎』(共同通信社、一九九五年)。
- (14) Lou Cannon, *Ronnie and Jesse: A Political Odyssey* (Garden City, NY: 1969); *Reagan* (NY: Simon & Schuster, 1982); *President Reagan: The Role of a Lifetime* (NY: Simon & Schuster, 1991); *Governor Reagan: His Rise to Power* (NY: 2003).
- (15) *The Economist*, January 8, 2011, p.39.
- (16) Edmund Morris, *Dutch: A Memoir of Ronald Reagan* (NY: 1999).
- (17) Alonzo Hamby, *Liberatism and Its Challengers: From Roosevelt to Bush*, 2d ed. (NY: Oxford University Press, 1992), p.339.
- (18) マイケル・サンデル(鬼澤忍訳)『これからの「正義」の話を生きた——いまを生か延びるための哲学』(早川書房、二〇一〇年) 三三三—三三六頁。
- (19) Gil Troy, *Morning in America: How Ronald Reagan Invented in the 1980s* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 2004), p.11.
- (20) John Ehrman, *The Eighties: America in the Age of Reagan* (New Haven: Yale University Press, 2005).

- (21) Sean Wilentz, *The Age of Reagan: A History 1974-2008* (NY: HarperCollins, 2008).
- (22) *Ibid.*, pp. 450-51.
- (23) Steven F. Hayward, *The Age of Reagan: The Fall of the Old Liberal Order, 1964-1980* (NY: Crown Forum, 2001); *The Age of Reagan: The Conservative Counterrevolution 1980-1989* (NY: Crown Forum, 2009).
- (24) Lou Cannon and Carl M. Cannon, *Reagan's Disciple: George W. Bush's Troubled Quest for a Presidential Legacy* (NY: Public Affairs, 2008).
- (25) *Ibid.*, p. 54.
- (26) Lawrence W. Levine, *The Unpredictable Past: Explorations in American Cultural History* (NY: Oxford University Press, 1993).
- (27) David Rothkopf, *Running the World: The Inside Story of the National Security Council and the Architects of American Power* (NY: Public Affairs, 2005), p. 212.
- (28) Raymond L. Garthoff, *The Great Transition: American-Soviet Relations and the End of the Cold War* (DC: Brookings Institution Press, 1994); Frances FitzGerald, *Wag out There in the Blue: Reagan, Star Wars and the End of the Cold War* (NY: Simon & Schuster, 2000).
- (29) John Patrick Diggins, *Ronald Reagan: Fate, Freedom, and the Making of History* (NY: W. W. Norton, 2007).
- (30) John Arquilla, *The Reagan Imprint: Ideas in American Foreign Policy from the Collapse of Communism to the War on Terror* (Chicago: Ivan R. Dee, 2006).
- (31) James Mann, *The Rebellion of Ronald Reagan: A History of the End of the Cold War* (NY: Viking, 2009), p. 346.
- (32) Nicholas Wapshott, *Ronald Reagan and Margaret Thatcher: A Political Marriage* (London: Sentinel, 2007).
- (33) John O'Sullivan, *The President, the Pope, and the Prime Minister: Three who changed the World* (DC: Regnery, 2006).
- (34) ホニー・アンジェロ (山村直子訳)『ファーストマザーズ——わが子をアメリカ大統領にした母親たち』(清流出版, 二〇〇四年)の第九章「それでは私のタッチャー」。
- (35) ナンシー・レーガン (広瀬順弘訳)『マイ・ターン——ナンシー・レーガン回想録』(読売新聞社, 一九九一年)の七「ロナルド・レーガン」を参照。
- (36) 概説的だが、日本語によるこの種の試みとして、中西進『アメリカ大統領の深層——最高権力者の心理と素顔』(有斐閣, 一九八八年)があ

- (37) 上島春彦『レッドバージ・ハリウッド―赤狩り体制に挑んだブラックリスト映画人列伝』(作品社、二〇〇六年)、一二二―一二三ページ。
- (38) 例えは、Stephen Vaughn, *Ronald Reagan in Hollywood: Movies and Politics* (NY: Cambridge University Press, 1994); Marc Ehot, *Reagan: The Hollywood Years* (NY: Three Rivers Press, 2008).
- (39) F・A・ハイエク(西山千明訳)『隷属への道』(春秋社、一九九二年)。
- (40) ハリウッドと「赤狩り」については、ヴァイクター・S・ナヴァスキ―(三宅義子訳)『ハリウッドの密告者―一九五〇年代アメリカの異端審問』(論創社、二〇〇八年)、上島春彦『レッドバージ・ハリウッド―赤狩り体制に挑んだブラックリスト映画列伝』(作品社、二〇〇六年)を参照。アメリカの保守勢力はかねてからハリウッドの政治性を危険視していたし、その大衆的影響を危惧していた。
- (41) ハリウッドにおける彼らの役割については、エドワード・J・エプスタイン(塩谷絃訳)『ビッグ・ピクチャー―ハリウッドを動かす金と権力の新論理』(早川書房、二〇〇六年)を参照。
- (42) Wills, *op. cit.*, pp. 211-12.
- (43) Darrell M. West and John Orman, *Celebrity Politics* (NJ: Pearson Education, Inc., 2003) また、海野弘『セレブの現代史』(文春新書、二〇〇六年)の第八章を参照。
- (44) Robert Dallek, *Ronald Reagan: The Politics of Symbolism*, 2d ed. (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1999), p. xv. レーガンの象徴機能に着目した日本での研究としては、五十嵐武士『政策革新の政治学―レーガン政権下のアメリカ政治』(東京大学出版会、一九九二年)を参照。
- (45) レーガン時代初期のアメリカの政治と社会の保守化については、フランス人ジャーナリストのギ・ソルマン(Guy Sorman)が紀行文風の興味深い観察を試みている。ギ・ソルマン(秋山康男訳)『レーガンのアメリカ』(新潮社、一九八四年)。著者は明らかに、同じフランス人であり九世紀に優れたアメリカ文明批評を記したアレクシス・ド・トクヴィル(Alexis de Tocqueville)を意識している。
- (46) Daniel Patrick Moynihan, *The Politics of a Guaranteed Income: The Nixon Administration and the Family Assistance Plan* (NY: Random House, 1974), p. 131.

